特
302

羽田富次郎著

役者教訓妙々奇談

初編

泉竜亭是正作
櫻齋房種画

役者教訓妙々奇談 初編

栗園發兌

去年より今年へ年と越園へ咲初菜の花へ来て終日遊ぶ蝶壮子気取で詠めても性聖賢の器なりねべさまで心よ樂まぞ只春の日の長閑さよ思いぞ睡眠枕辺へ訪ふ者へ別人なりぞこへ予が常よ好し道劇場名誉の古人の俳優予と賞して言ひつつ當世我輩の子孫御見貝強く世よ時栄とつへども惜むべ皆一癖ある者客方の御眼と煩いしるぞ恐とられい今一癖療治の為藝道の善悪その性質と書顕し教訓の端ともせよと言葉巧よ勧れとも予ハ又御見貝様の思召も如何やと再三辞ぜれど猶免さぞ是非なく取し烏毛の筆もどうやら憎れ口調仇役の片言よ綴合せし文作も僕なるぬ古人の俳優老翁集者が教へよ任し有の侭と書の如し

泉龍亭是正述

特43
302

去年より今年へ年と越園へ咲初菜の花へ来て終日遊ぶ蝶荘子
気取で詠めても性聖賢の器なられぬべさまそ心よ樂まそ只春の
日の長閑さを思いを睡眠枕辺へ訪ふ者へ別人なるぞ予が常よ
好し道劇場名誉の古人の俳優マ下と覚して言ふ当世我輩の
子孫御貝ふ負強く世よ時栄とくとも惜むべ皆一癖あるを有客方
の御眼を煩はしむるぞ恐なれい今一癖療治の為藝道の善悪その
性質と書顕し教訓の端ともせよと言葉巧よ勧れとも予又御貝ふ負
様の思召も如何やと再三辞を礼と猶免さぞ是非なく取し烏毛の筆も
どうやら憎れ口調仇役の序言よ綴合せし文作も僕なる古人の俳
優老翁集者が教へよ任し有の侭と書の如し　泉龍亭是正述

役者
澤村田之助
市川小團次
寿海老人
助高屋高助
人の集會
坂東彦三郎
庁岡仁左衛門
市村竹之丞

一 中村壽三郎　　市川左團次ゲ所業を匂る
一 三代目澤村田之助　　同苗田之助を恨む
一 故人嵐璃鶴　　元璃鶴　市川權十郎ゲ吝気を詈る
一 片岡仁左エ門長子　　片岡我童ゲ色情を止る
一 中村歌右エ門我身を悔て　　中村芝翫へ手跡を勧る
一 市村竹之丞長子　　尾上菊五郎市村座の離散を憤る
一 中村嘉六我子　　中村時藏ゲ身の行跡を愉る
一 助高屋高助長子　　今高助を懲る
一 一手の崇り成佛して　　岩井半四郎へ長物語をする
一 七代目壽海老人　　九代目市川團十郎と説

役者教訓妙々奇談初編

泉龍亭是正述
櫻齋房種画

海老を釣て不意も父に逢ふ

昨宵の雨後の朝ぶき晴渡りたる夏の日や一入暑気を堪難き袂涼しく暮さんと爰に俳優の親玉と親の代より手練者二とゝ下らぬ市川團十郎い平常のゝ好きゝ川狩に永き日影弦遊

たんと日和能まゝに唯一人思ひ築地の枝川へ

連分て竿うち入れを釣るよ餘念のなく折うう浮頭の動きよ眼を著て扨こそ獲物の罹りしと拍子抜さぞ引揚るべ此内川よ珍しき異る龍蝦釣揚たり團十郎い心嬉しく手を差伸て捕んとする時不思議や脆の痹を更よ體内の動ねたこそ怪しやと思ひしうち海老こそつくと四足を伸べ眼をむく出し忽ちよ此世を去し我亡父七代目壽海老人ゞ貌とこそいへ成よける團十郎い底気味悪くも又懐しく思ひし時海老藏莞示と打笑ひ「汝と特て良久しと少しく謙叛譲りの見えあつて「さて世の中い三日見ぬ間よ桜ゝ形」と口号しも空るる和主も今でこそ河原崎の家を離別るし我先祖の家名を續しい近頃以て親父ゞ悦び是ゝ何ぞ増べうぞ併和主も幼少より河原崎の家よて手足を伸され大恩もなれを譬其家を出るを迎権之助殿が一族へ對し必ず嚴畧よをべうぞ恩を知らざるい鬼畜よ劣

りーと古語ふを聞りホン二木竹と云べ樹は竹我
継ー様るハ和主二人ゞ夫婦なり縁とハ言るゞ
媚きたる役者ゞ堅気な娘我要ーハ此親ゞ旧友
よも餘り例ー少き故ヤレ團十郎ハ田地御持参の
女房を貰ッさのヤレ御臺所持ざのアレハ経済の為ま
の何のと大きなお世話る人の疝気我頭痛ー病む
新聞上ーやアなるめーハらぬ潜上ナ人様の口ゞど
身代の助ふもありもありめーアりめー気真る女房

と貰ふさハ此親父も察ーく居るよ和主を他の
役者衆と少ー気質も異りて傾城藝者ー拘りぞ
又御見貧様のお女中るどを誰ゞもゞ嫌ひ故夫で
こそなを気真る女房を要ーるーん是を近頃感
心るとぞよ恁る賤き営業でも團十郎とりめー時ハ
役者の中の長るをべ女郎や藝者と貰ふと違ひ
弟子朋友の聞えも善我子を賞るなりねども流
石ハ平常名将気どりの和主ゞ挙動近頃此親父も

恐を入さよイヤ恐るくとりくべ去年の冬和主ゞ宅へ盗賊ゞ入〳〵とナ危いとの是ゞマア往年今戸の宅よて権之助殿の様ゑとゞ有て見る芸人和主ゞ兄八代目と云ひぞうゝ因果らしくッて市川家の名折れとも成べきよ先い其身よ恙なく大難を小難で遁を〳〵と其時早速赤飯と蒸〳〵諸所方々よ配り〳〵そうゑゞ能も心弦着らをたりイヤ心付さと云やゝ和主ゞ先名を譲らを〳〵璃鶴殿ゞ女難よく位科と蒙り懲役とゑり〳〵時芝居町の支也名誰ゝ一人構ふ者ゑたを和主をうい心切よ差入物弦ゑとそうゑゞ是い近頃感心ゑとゞ假令薄情ゑ地よ住ともゝ仁心ゞゆゝざれば其家迚も繁昌ゑさをイヤ繁昌とゝゝ和主達ゞ営業昔と違つく今い浮世よ行れ願ふてもゑた身の仕合せと其身を顧くく猶更卑下せねばゑゝぬ身と何そや時知り顔よ誇りー挙動コリヤア和主ゞ了簡違ひゞ先第一よ役者ゑ

どゞ頭と散髪なるゝ身は西洋服とまゝゝ美髯公とでも呼ばるゝ風俗なれど靴などゝ履き歩く太政官なでも昇進せゝ心得以の外の変なるぞや恐れ多くも　王政御一新以降貴賤の差別はなれども今更改め名ハ堀越薫と替まとも役者の白ハ失せぬものなり此親父ゞ祖父白猿殿ハ「錦着て麗の上の乞食なれ」と斯の如く卑下されゝと和主も少ゝ聞ぬべゝ昔ゝ當時と違ひ役者とゝ人外のやうに思はれ河原者と称まお素人方とゝ交りさえるぬ身ゞ今ハ上官なれ御方迄ハ御目通りを免さまゝ張能事ハ思ひ虎狼の威を輝せハ近頃已まと知らざる挙動役者なるゝ者ハ身ハ紅白粉を粧ひ衣類も長きとまゝひゝ故いとで変生男子同様なれハ何も散髪なるとまるいでも能とゞハ仇馬鹿々しい頭ハ怪我でも為やアるめゝ狂言の度毎ハ羽二重で縅ちゝゝ其上ゝ青天を塗ゆる御見物

様わか気もお閑遊でさぬう知らねども此親父杯ガ
見る時ハ狂言最中追々顔と頭の色ガ思ひ合ぬ
様でどうも見苦しハ第一ヨマア頭を緘るゞみ手数
ふもるるざらう如何ま流行なれバとてお多福の半
元服と役者の散髪ハ不都合る者ざョイヤ不都合と
ゝべ和主達ガ営業を教導職と称ふ由イヤハヤ馳走
過さ名目ありゝ何と教導職の坐ま於て嬉奔を御覧ま
入ま看客方の心を動さハ第一の不都合ゝとい
何る教導ぞや嬉導色とでもるガ〳〵斯云と
どうゝ和主と朝弄ゆうざガ御維新以来ハ春画さ
停止ゝまま濡事の丸もたハ餘り天下を軽んぜる様ざ
序るガうゝまま聞もガ和主ガ此節舞臺でのもとる
何やら名人振ガ鼻の先へぶゝ付て見ゆるハその
證據まハ餘りせうふもるく身躰とも動さざ何ぞ
とゝまとヤレ気合ざの腹と見るとゝまガ何も五
臓四の看板ドやアるゝまハ腹を見るまも及ざ

市川團十郎
川狩して壽
海老人に逢

山寺の鐘も撞木を當ねば音色も分らぬ唯坐して
せりふも言ぬ身うちをも動うさぶ夫まく名人無類
と言れるを癖と蹇も名人あるべや諺に云和主
ゞ仕うちをおけ威しとも言ぬきう然なれ此頃
芝居と見初めの人半過通の看客へ和主ゞ仕うち
に驚きの人ど何様してく狂言場數を御覧ドさ芝
居功者ゑ御方へ如何ゑど和主ゞ名人振一倍食せ
て驚ゥをとも其手おやアるうく駿きめえぶ夫に
奚や和主ゞせりふに兒角漢語を遣ふさうゑ
ゞ知ッくの通り芝居へ無筆の学門所まづを仕
女中お子さゑ方の見物も名何も其様に六ケ敷
せりふ云ふも及ソレへ當時の流行言
葉で湯屋の木拾ひ酒屋の德利を拾ふ童僕もで
ゞ君だの僕ざのと云ふ時節も名何様でも宜と
も云ふの切腹と割腹とのよー何も薪ざッ
ぱやアるめー腹を割とのよも及ぬも

同じ事なら聞馴れし切腹の方が分りが宜い又
との節でい上幕の出声弦停止さそうるこう近
年い混合の狂言が流行ゆゑ何もの所で出がいかる
やら看客方い御存もなたよ出声もかけを理不尽
よ突然と出がいかりていとりやら可笑る者なんぞや
餘り事を新よせを」且の夏へ利発の様よ見も是
ども始終の勝利覚束なく迷惑をる者も出来る
夫過去年勧業式の前茶屋などの騒動生死のことも
いで来らば人の議りも方見しく是い和主が一存
よていいなりねども其処が一座の長とも成れを太夫
元とも商議の上諸事万端よ心と配り人の難儀
よるなる様取計よが長たる役なり和主も常なる
好き道ゆゑ夫よ效ふて言く聞きが先座頭と云
を一隊の長なり乱世の時なりせば所謂元帥の職
なり余の仕手方い則ち士卒是を指揮して看客の
大群と引受昼夜の奥行よ我先へと功を争ふい是

ぞ所謂接戦最中と思ふあり御客様の御機嫌よ
適ひ大入大繁昌い云ぞと知るーー大勝利座頭の才
配柔弱たれば取よ足を大群の御見物様ハ劇場面
へ押寄ぬいぞ御客のたぐるも遠まわの次第々々よ
御不連とるり是ぞ世よりよ兵粮責雲井遥よ鬢髪
しきゆうげんづくしの緋地の幕もりつゝ知らぞ引
落ーー櫓ハ虚ーく風雨よさらし茶屋ゞ軒端へ掛
廻らを花の暖簾ハ巻納め雨戸を楯とする時を

内所の借金破裂るーー遂よ防戦術るくーて敗軍の
色と顕をも又勝利と得るも皆是座頭ゞ方寸の
内よりり然ばハ能劇場を以て厳守らんとせば新
るるとるさば往古時代物一流大切所作事を以
て奥行るさば百発百中當らぞとりよるーー然
る成以て古今の名将軍令と立るも皆古法と用
ゆるなり諸事万端城よりて人数組の法令戦ひの
指揮と是皆古と師とる其道よ相隨よ是今の名

將ゐり新ゐ我意を以て利発の事をまゐる者先當分
ハ能とゐくども始終の成就へせぬ者ゐり古法古例
と以て謀ゐる時い誰ゐ一人否む者ゐく自然と諸人
の靡く所よて城内の元帥只城と守ゐの法古法古
代の良將名將の跡と鑑とゐ楠ゲ千早の城赤松
円心ゲ白幡の城或ひい黒丸の城近くい長篠の城信
州上田の城その法古き城守り毛頭私の權威ゐく
相守ー故自然と其妙術と顕ー強きと磐石の如
ー然べ劇場とても左の如く古きを以て師とまれを
是又泰山の安きゐりと壽海老人存命昔ゐ替り
ゐく銀張声の高調子ゐ團十郎い説動せられ物云
度も口篭ゲて五躰ゐ浸き冷汗い是ぞ南柯の夢ゐりる

橘の香ゐ蹴歴ゐく菊の花

色香さへ盛久ーき菊五郎今日亡父ゲ命日ゐ當り
をづさね新富座も折ゐく此程休みゐて我菩提所
へ詣んと行方と急ぐ法の道三ッ目も過て四ッ目ゐ

る先祖親御ゞ開基せし竹之丞寺へ来よされば車を下つ寺院へ入り墓所へ至りて香花や手向の水も良果て持佛堂へ至らんと勝手の方へ廻り行頼もの声へ納所へ出て莞示と打笑ひ「是へく能う こその御参詣最前より且那どのをお待兼の珍客なりいざ彼所へお通りなりて御謁見遊ばされよと告し詞へ菊五郎我より先へ爰へ来つ待とし云る其人へ誰なんと思ひつゝ襖を颯と押開き見まべ

おもそもも如何なるゝん実父市村竹之丞昔へ替らぎるそくと莞示へ笑顔拵作りヤレ懐しや我子なり しゝ今日へ和主ゞ来やるでなるらうと此親父も如来様よりお隙を貰ふて疾より爰へ待まーさマア和主も親子の縁の薄きみや稚き時より我へ別是親のなた子へ兎へ角へ憂難難をまるて有うと草葉の陰で案ドさより産ゞ安さの成長り今でへどうゝ東京中の御見負なるく役者の中で

の役者一匹二とん下らぬ能評判未来で聞えびゝ
嬉しがる親の心子い知らぎ今でい和主も尾上
菊五郎とゐり寺島清と称び亦弟ぬい坂東と名乗
橘の二字いゐまども兄弟共ょ市村座を離散せ
しい近頃和主ゞ利発ゐも似合ざる親父ゞ心ょ
適いぬ挙動何ぞや名を清と名乗ども心の中い
濁江の親のゐるせと市村座へ住んと思ふ心も
ゐく他名を継しい何事ぞやト竹之丞いあり昔ょ替り眉毛をひくくして憤り

此親父いナ冥途黄泉まありく竹之丞殿い立派
ゐ子供二人ぢで在ゐゞ二人も残らぎ親の座元
を續ざるいぞうしと譯ぎと草葉の陰ょく朋友
どもゞ譏らくを傍で聞居る親父の切ゐさ親の
家名をうち捨て先祖へ何と言訳ゐさん不孝者ぬ
ゞかぬくとどの顔さげくの寺詣で親父ゞ功徳
ょゐる可きや却ッく修羅の妨げぞやとい〻親
の代よりしく借財等も多き櫓跡へ直らべ難儀

も有うゞ其所幾兎ふも角用ふもたて切親の跡を蹈へるゞ先祖へ經養我への孝ゝり斯るとも知らざゝー和主よても余もたゝド親の口ゝゝ云でゝよゝれど隨分世事よも物賢く舞臺での狂言も左まで名誉とゝふゝたゝう孫ど今ゞ丁度上手とゝふ程能所でゝ見べゝそ看客方の御目よ適ひ何一点の言所ゝれど惜むべー其人よーく其病ひゝゝ只和主ゞ一癖ゝふ親の讓りー家とも忘れ一生懸命金を溜ゝゞ身の病ひゝつとも今ゝ昔と違ひ金で命も買ゝる世界譬へ人ゝ倒ーても我金ゞ無ゝりゃアゝうぬと薄情な世の中故無てゝゝぬと云者の何も其様よ血眼よゝりて溜ゝゝも及ぬとゞ亦嫉女お里どのゞ似ゝ者夫婦とゝひ常よ費を省き節儉よーて異ゝ金を溜ーとナ是ゝ近頃感心かゞゝ金銀とゝふゝ物いなくてゝうぞ亦有過てゝ苦の種盗人の愁ひと増ゝゝ是よゝりて深草の元浄和尚も糟

秋瓶一ツるれを盗人の患ひなーと云ふ何も役者なとぐらゝ者い餘り事を吝嗇なさば後世を思ちば有べける様ょ人ゝも遣て悦をまるゞ身の祈禱ゝり既ょ唐人の語ゝも書を積て子孫讀と能いを宝を積て守るとゝ一只子孫繁栄の基礎い隠徳をまるょ如ぞと聞り今ゝも菊坊ゞ成人しく賣出さうとまる時い和主夫婦ゞ溜たる金も湯水の様ょ遣いねべそとゞどうも人気の立ぞ役者なぞらゝ者い花を賣のゞ営業も名費る金もまるねをゝうぞ朝夕のやり操ょ借金い山をなもも少しも恐ばば滄海の魚肉萬国の銘酒ょ飽ぞ驕奢と極めねべ大名代と言ざるゝり斯言とどうやら和主を吝嗇の様ょ云やうだゞ何も左様らゝ訳ゞやアねゝ親とらゝ者い親馬鹿とらひ能ゞ上ょも能評判をどうぞ和主ょ取せとく子故ょ迷ゝ夜の鶴翼の下ょ抱ゝ一我雛鳥の頃ょりも別ー侭ょ月日さゝ二

十年余も立暮て再會さし親子ぐるみ嬉し涙よ取交て父竹之丞ぐ長物語り聞よりみても菊五郎胸苦ハ敷胸よ手を我うち知らぎ奥の間よ當て寐たるうぎみや有るん正ぎう父へ見へーと思ひーとへ春の日の日影も長くとろくと遂手枕の夢まぎのうるる

貴兄弟子と詰る

一様の花檀ハ蒔ー朝顔も同種とへ言るぐう皆と成同じうせぐ思ひくよ咲深る色と競ふく秋草の

今と盛りの我庭面主ド市川左團次ハ千草の色と詠めんと椽先近く進さし折籬の栄折押ぐうへ磬の咲拂して入来者ハ別人ぐうぐ是ぐん中村壽三郎真の兄とへ言るぐう兄弟其性同うせぐ然なれぐと そ常ぐ互ひよ疎遠の事ぐるりーぐ今日ハ平常よ綟替り壽三郎ハ莞示よめと睦ーく語るやう「今日ハお主も家でうと久ー振で訪ひ兄角客営業とする者ハ互ひよ體の自由よるうぐ思ふね無

沙汰と致しまして待ぬ月日い立安く最早お主も此
當地へ参りしより二十年近くも成ぬべし其頃
へ東京も花のお江戸と喚れたゞ浅草猿若町二丁目人
乗込御目見狂言務めし時私ゞ陰で評判聞バ何
も婀娜で歯ゞ浮やうざのヤレ訛ゞ強いのと散ぐる
評判ア困ッさ者ざ迎も東の水みやア染めんどうで又
古郷の空へドロンくと思ひの外亡師小團涙殿ゞ引立
て何やら斯やう御當地の者と思ふ間もなく小

團次殿の内儀かとどのゞ大層お主様可愛ゞ
芋田樂と一本振舞れさそうゞ夫ゞ味噌の附初
めでどうも甘く行なんざゞ其内師匠ゞ病ひよ染
程なく黄泉へ赴くと跡へ残るいおあとどの便りな
き師の女房弟子とし捨置い本意ようなしぶみど
とお主ゞ軽容よ事を謀りおあと殿を引取れ人目
も恥ぢ手と引合ての寺詣でイヤハヤ呆ると物ぞ知ぬ
ゞ佛と言なゞ夫やア餘り冥利ゞ悪い其様とい

決して有ハ去り人ゞ萬一なりとも主をうの恥
ゆア孫人此兄とても赤面とんるぼろうを営業で
も慎む所ハ此度堅くせねをあらぞ鬼角役者と
ゆゝ者ハ世上のうゝの評ゞ肝心イヤ評判と言やア
其後おおとどのゞお主をどうう賣出ーてと背腹揉
まて一生懸命景気を賣さゞ何うやまゞ當ツ
て以前の評ょ事替りお主ゞ今の大評判ハ粋きう
とーて婀娜ゞあんと東京中の御贔屓多くお主ハ

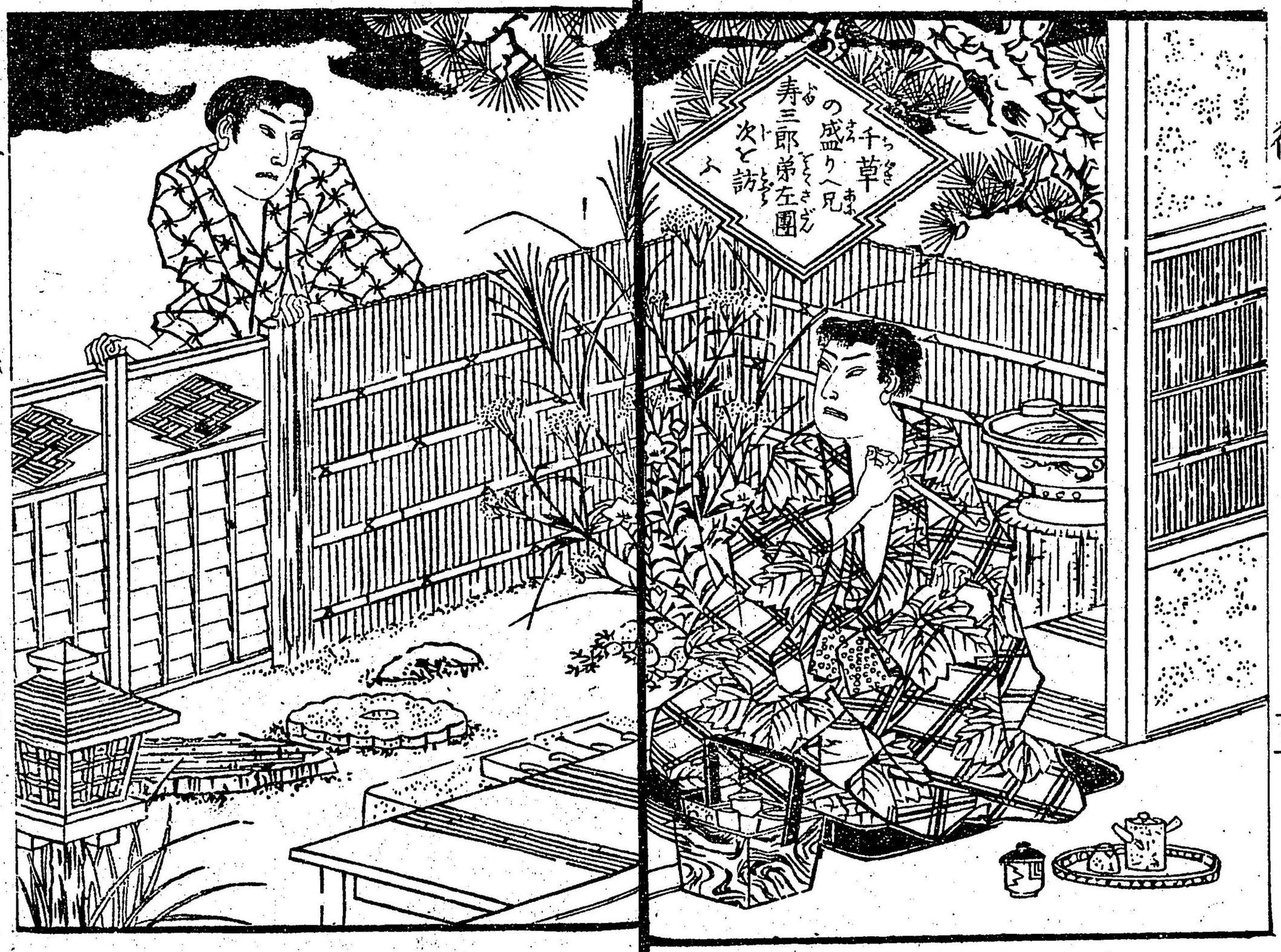
どうも仕合だよ當時左團次とりゝ時ハ勢ひ廣大
よーて御華族方も及ばね勢ひ往頃おおとどのを
初め藝妓八九名と其餘末社共と伴なれお主ゞ
箱根への遊山七湯廻りの大愉快折節隣坐敷へ
德川某公の在ーお主達ゞ杯盤狼藉ょ驚きめひ
流石の御方も其場を早々立退めひーとや其時お
主ゞ斯華族方ろくも吾酒戰ろんよも太刀討ハ及
ぶまじと誇ろふりふさそうるゞ夫ハ近来了簡違ひ

さ湯治場などゝいふ所へ諸国の人の入込み如何
なる方が在り知れざる先彼時は身分を持たしたる方
も何事もなくしが是がまあ向見ぬの勢ひでも
見さげゝ大騒動が発るばかりそりやあ己が金銀を抛
うつく思の侭に洒落の紙誰が何とかいふものうと
か主は心に思ふが其処がどうも役者などゝいふ
者は兎角物事を内輪にしたる諸人の敬愛を招く
が肝要なるに何ぞや如何に悪戯が過ぎて喜

知六殿を初め其他の未社が尻の放ッとを為さ
そうざが近頃尾籠千万なる其様なる為るもの
だうく近来臭気止が流行まるゝ仇馬鹿くしい
道化るも度を欠き十日餘の逗留に八百餘円成
遣ひ捨かの主も狂言で仕やうでなくが梅川忠兵
衛でさへ二十日餘に五十両遣ひ果して二分位
は残をりを何ぞや十日の道中に八百円を皆
遣ふ左團次は強勢ごと御見負の御方はお讃

の声も掛らうゞ心なる御方様へくらゝ無益る金
ゞなるを大恩請さ師の実子今小團次殿へ蒔掛
て今一應引立さゝ人気もぞうゝ立でならう然を
れを亡師小團次殿も嘸や草葉の陰で悦ぶざら
うよ左様る支まへ心も付ぞ誂戯果たる笑止や
と誹りのよか方もならう序るゞゝ言て聞そゞ三
年前よかと婆どのゞ病の床よりし時お主ゞ異
る厚き手當こりやア私も感伏しさゞ婆どのゞ死や

否藝妓小花どの紙引込しへお主ゞ気質ゝも似合
ざる近頃早まつさきもぞゝ夫りやアお素人方でへか
主ゝ年で女房ど持へ遅へ極ざゞぞうも藝人と云
のゝ役者まへ限らぞ女房ど持と鬼角人気ゞ落
て何様もゆゝぬよか主ゞどへ私と違ッてお女中様
の御具負も多いこうゝ女房と極ぞちゝしみるしても
て支よ惜いと紙仕でうさ何やうか主も小花のか
かゝどのと娶てゝゝ人気ゞぞへと落着さやうさへ


千草の盛り入兄
寿三郎弟左團次と訪ふ

うーと見ーよるぞ今は恋ーき三年迹は亡らまさ
かと婆どのは流石は縛煉ぢけからく弟子らや出入
の者へ大層切なるまが冥ろさとの風聞とりや何も
かかく孫どのく支ドやア孫人が全体役者の女房は娼妓
や藝妓へ似合の様だが貰ふとを商業はーさ者
へ鬼角吝嗇坊で出まとが嫌ひよりり已が舌弦も
虚とへ出ーー得ぎ亦か貰ひ申ま物るうべ屎柄扨の柄
の脱さのでも能とりく手の付やりのるへ嬾懦さ者

だよ総体者の字の付さりのは一人でも能者へね人
よ私も役者ぢが先第一は藝者へ嬾懦で客を迷
へーー醫者へ早く病人を損ひ神道者へ人を惑ーー
占者へ虚言弦吐き作者へ亡者は劣るとりく
イヤ亡者とりくをか主が菩提所深川浄心寺かと
婆どのが石碑異る憤発の仕やりでからく石の玉
垣四方と廻らーー石榧墨々とーく擬宝珠へ雲を
帯び正面へ蠟石の香炉御影の臺石其結構な

ると言語は尽し難く亡師小團次どのゞ石碑も立派とん言ゝゞかと婆アどのゞ石碑と競べくい遥かに劣りし建立なり役者などくゝのを名聞ゞりの中に見を知らぎの御具負様ゞ寺詣でをし下され線香の一本ゞ上へい手向て下さるか方もなり其時ひよつと御覧じてヲヤく小團次の石碑より女房の墓ゞ立派ざよヲヤマア可笑い昔ゞ今は至るまで亭主の墓より女房の墓を立派に建るとゝふい遂に一度も覚へゞなへヨとりやア施主の左團次ゞ物を知らざる仕方ざとお笑ひなはべか主の恥辱か主の恥辱い兄への恥なり私ゞ評判悪しき旅聞ようか主ゞ風聞悪しをと聞き腹の立のい真身の兄弟ぞるぞか主ゞ評判を能ゞ上へも能様へと思ふてくくの此咄し必ず腹を立まへぞや面白くゝぬ長物語りドリヤか暇と夕日影いろゝ暮て夜芝居の太鼓の音のドロ〳〵

「若へ親方さんモウ三ツ目の木ゞ廻りまして
お早くお顔をなされまして搖起されて左團次
へたつと驚き四邊を見まどを向ふ鏡の姿見へ我
面影を写まども今も在して兄貴ゞ面影見へぎ
いなまど一々まで説まして言葉耳根まで残る是なん
思ひ左團次ゞ樂屋まで睡眠む夢さめて開ゞん
敷もする化粧幕明近き三階の一ト際賑ふお女
中連暖簾の彼方へ左團次ゞ樂屋を垣間見あふ
折狂言方の此所まで来ゥ「モシ親方さんへ今度の
夢の幕ゞ御見物様の御意まで適へばまさ此後も
引續きて夢の幕を出して呉うと二人ゞ咄して傍
まで聞せあらうべ看客の御奥様方夫へ高評
ありて後編発兌の妙々奇談早出せよと拍手れ
賣出し當日ようゝ偏まで御購求を願上奉りまし

役者教訓妙々奇談初編終

御届明治十四年六月九日

編輯兼出版人　本所外手町廿二番地　羽田富次郎

發兌　同　横綱町一丁目十四番地　兒玉弥吉

特43
302

074905-001-9

特43-302

役者教訓妙々奇談

泉龍亭　是正／述

M14-15
CEK-0339